燃ゆるとき

2006（平成18）年１月16日鑑賞〈東映試写室〉 ★★★★★

監督＝細野辰興／原作＝高杉良／出演＝中井貴一／鹿賀丈史／津川雅彦／大塚寧々／長谷川初範／中村育二／木下ほうか／伊武雅刀／サマンサ・ヒーリー／スティーヴン・グライヴス／ジョン・ギブソン（東映配給／2006年日本映画／114分）

……今ドキ、こんな日本型会社の「企業戦士」がなぜ主人公に……？　思わずそう考えた私だったが、典型的なアメリカ会社とも、「ホリエモン型」会社とも異なる日本企業とその社員の姿がたしかにここに……。もっとも、それをプラス評価するためには、小泉改革の進展とデフレの克服そして株価の回復が前提だから（？）、「ポスト小泉」を軸とした2006年の日本の経済運営が、問われるはず……。『金融腐蝕列島・呪縛』（99年）ほどのインパクトには乏しく、また、ちょっと出来すぎの感はあるものの、さすがに高杉良の経済小説は面白い……。

『金融腐蝕列島・呪縛』に続く高杉良の原作だが……？

高杉良原作の『金融腐蝕列島』と『呪縛　金融腐蝕列島Ⅱ』を原作として、役所広司主演で映画化された、『金融腐蝕列島・呪縛』（99年）は、『レインメーカー』（97年）とともに、私が2000年に映画評論を書こうという意欲をかきたててくれた思い出の作品（『シネマルーム１』112頁参照）。

その後高杉良が『小説　ザ・外資』など数々の経済小説を書いていたことは私もよく知っていたが、残念ながらそれらを読むヒマはないまま……。しかし、今回彼の『ザ・エクセレント　カンパニー／新・燃ゆるとき』と『燃ゆるとき』を原作とした映画が完成したため、大いなる期待をもってそれを鑑賞。さて、その出来は……？

「アメリカ大陸を日本のカップ麺で制するー！」の実現は……？

高木遼太郎（津川雅彦）を創業者として築地市場に誕生した小さな食品会社は即席麺・カップ麺を主力商品として急成長し、今やアメリカにも工場を持つに至っていた。時は「20世紀終盤」。しかし、アメリカでのカップ麺競争も、今や安価な韓国製商品に押されて売り上げが減少し、危機的状況を迎えていた。こんな状態では「アメリカ大陸を日本のカップ麺で制する――！」という、高木社長の悲願の達成など、到底ムリ。

そんな危機感をもった現地法人「SAN SUN INC.」の社長深井光司（加賀丈史）はこの窮状を打開するべく、本社資材担当の営業マン川森潔（中井貴一）を日本から呼び寄せるという決断を下したが……。

当然抵抗勢力も……？

いくら「資材担当」として優秀であっても、英語を自由にしゃべれるかどうかという能力は全く別。妻の隆子（大塚寧々）と最愛の息子隆一を置いてアメリカに単身赴任する川森だが、お迎えの車の中でも英語のスピーチの練習をくり返しているところをみると、あまり英語には自信がない様子……？

これに対して、川森を現地で迎えた幹部たちは、その仕事上の能力はイマイチ（？）ながら、長年現地で仕事をし生活をしているのだから、英語能力は当然上……。しかし、「ここはスラムだよ」と川森に語る工場長の大村薫（伊武雅刀）や営業担当の幹部である小田島武史（長谷川初範）、そして経理担当マネージャーの西村一郎（中村育二）などは、会社の業績が落ち込んだことについて互いに責任のなすりつけ合いをしている典型的な抵抗勢力……？

私も弁護士生活31年間の中で、こんな根性のサラリーマンを何人も見てきたから、こういう連中を見ていると無性にハラが立ってくるタチ……？

しかし、さすがにクォリティコントロールマネージャー（というと難しいが、要はおいしいラーメンをつくるのが仕事）の山口展人（木下ほうか）は技術畑の人間。川森がラーメンの味や、麺を揚げるときのオイルの味まで判定できる舌を持っていることを理解するや、俄然川森のファンに……。

とはいえ、こんな抵抗勢力が多い中、果たして川森の純真な（？）挑戦は進展し、高木社長から深井に対して与えられた「１年以内での業績回復」という、かつての日産のカルロス・ゴーン社長に与えられたものと同じような使命は達成できるのだろうか……？

有能なアシスタントは貴重だが……？

大村工場長が「ここはまるでスラムだよ」と表現したのは、必ずしも自らの職場を卑下したものではなかった。まさに、工場内にいる約150名の現地従業員はメキシコ系を中心とした黒人、白人を含む人種のるつぼ。「勤勉な日本人労働者」を前提として考えれば、これらの現地従業員の管理が難しいことは当然。

長年現地でそんなしんどい仕事に取り組んできた大村工場長にすれば、いきなり日本から乗り込んできて何を原理原則論、理想論ばかり言っているんだと反発したのは当然かも……？　そしてそれはセールスマネージャーの小田島も同じだった。そんな孤立化する川森を支えた有能なアシスタントがキャサリン（サマンサ・ヒーリー）。

向上心が高く勤勉なキャサリンは日本語も十分マスターしているうえ、英語・スペイン語は当然オーケー。そして豊富な人脈も……。しかし、こんなキャサリンは同時にプライベートでは、暴力亭主と２人の子供の間で大変な様子。何とか早く自分の努力を認めて管理職に登用してもらいたいと願っていた。そんなキャサリンの意欲と能力を認めている川森は、その期待に応えるべく深井社長に進言したが、経費節減にそれどころではない深井はそれを却下。

希望を失い、期待と信頼を裏切られたと感じたキャサリンがそこでとった行動とは……？

まず、レイオフから

高木社長に対して「１年以内の立て直し」を約束した深井がまず現地でふるった大ナタはレイオフ。レイオフとは、業績の悪い時期を乗り切るために、回復期に再雇用をすることを前提として、一時的に従業員を解雇するアメリカの制度で、雇用調整と訳されているもの。深井は「業績を立て直したら、必ず呼び返す」と

説明したが、弁護士の私に言わせれば、実はその言葉には何の法的拘束力もないもの。つまり、この説明は「会社の立て直しがうまくいけば」という希望的前提にもとづくものにすぎず、ヘタをすれば（むしろ通常は）クビ切り退職と同じになるのがレイオフ。

したがって、「欠勤の多い者」「成績の悪い者」から順番にレイオフの対象にすると言われても、名前を呼ばれた労働者が納得しないのは当然。「従業員は家族と同じ」という「東輝水産」の、まるで「出光興産」と同じような「社是」をまともに信じている（？）川森は「何とかならないのか」と進言したが、深井社長の強い決断の前にはどうしようもなかった……。

日本流がメキシコ人に大成功！

クォリティコントロールマネージャーの山口と資材担当マネージャーの川森は売れる新商品開発のためには、それまで使っていた油とは違うアミーゴオイルが不可欠であることで、完全に意見が一致した。問題はその価格だ。アミーゴオイルの精油会社社長マルケス（ジョン・ギブソン）は陽気なメキシコ人だが、どうも頭から日本人を毛嫌いしている様子。しかし、そんなマルケスの元へ直接乗り込んで行くのが、日本流そして川森流……？　もちろん、通訳兼アシスタントとしてのキャサリンの同行は不可欠だが……。

しかし、そもそも最初の挨拶で名刺を差し出す川森の姿がトンチンカン……。「ここはアメリカだよ」「相手はメキシコ人だよ」とアドバイスをしたくなるところだが、逆にあくまで、実直かつ誠心誠意で、というのが日本流……？　さらに日本人にはとても飲めないだろうと言われたすごい度数のテキーラでも、あえて挑戦するのが日本流……？　「ハラの底を見せ合うためにはとことん付き合うよ」という、今では失われてしまった（？）、かつての日本流の企業戦士の姿がそこにあった。

川森がマルケスとまともに交わした商談は「30ドルは高いから25ドルにしてくれ」「いやそれはダメ」という会話だけで、その他にやったことは飲み比べのみ。意識もうろうとなってダウンしてしまった川森だが、さてその「商談」の結果は……？

セクハラ問題は日本以上……？

アミーゴオイルの使用があたり、「チキン＆レモンフレーバー」も大成功。川森の渡米時にはギスギスしていた幹部たちの心も通い合いはじめた。さらに、レイオフされていた従業員も次々と呼び戻されることに。深井のふるった大ナタと幹部一丸となった努力が功を奏し、SAN SUN 社は万々歳……？　そんな時突然起こったのが、川森によるキャサリンへのセクハラ疑惑。深井や SAN SUN 社の顧問弁護士の前でキャサリンの代理人弁護士が聴かせるテープには生々しいキャサリンの叫び声が。これは一体ナニ……？

イメージの悪いアメリカの弁護士

キャサリンの代理人弁護士はテープを聴かせるとすぐに席を立ったが、SAN SUN 社の顧問弁護士であるチャールズ・ライアル（スティーヴン・グライヴス）も「はめられたことはわかるが、訴訟は絶対ダメ。示談で解決すべき」と回答したうえ、「ハイ、今日の時間はこれまで」と冷たいもの。事務所を出てきた深井が「何と傲慢な弁護士だ！」「これで300ドルか！」と憤慨するのもよくわかる。映画だけではこのチャールズ弁護士が SAN SUN 社の以前からの顧問弁護士かどうかわからず、映画を観ている限りでははじめての相談のように思えるが、パンフレットには顧問弁護士と書いてある。さてその実態は……？

ここで弁護士の料金体系について知識のない日本人に教えておきたいことは、アメリカではほとんどがタイムチャージシステムとされていること。日本では昔ながらの、事件ごとに着手金、報酬を支払うというスタイルがまだ多いが、日本でも一部の大手法律事務所では、タイムチャージ制を取り入れているところも……。もっとも、その良し悪しはそれぞれの自己責任での検討が必要だよ……。

第１部と第２部構成にすべき……？

この映画は、第１部と第２部の２部構成にするべきではないかと思うほど、前半と後半でガラリとそのテーマが変わる。

セクハラ事件で日本に戻された川森は、深井の勧め（バクチ？）どおり、高木

社長に対して直接辞表を提出するが、高木社長はこれに対して、いかにも日本企業のボスらしい対応を……。ここらの演技力はさすが津川雅彦と感心。そして、創業社長である高木と、一貫して彼を支えてきた深井が、お互いよくここまで頑張ってきたなと確認しあったところで、この映画はジ・エンド……。と思うと大まちがい。

それから3年後のアメリカを舞台として「第2部」が展開される。その第2部のテーマは「労働組合の是否」。

再度気合いを入れ直して鑑賞しなければ……。

「ユニオン不要論」の是非は？

SAN SUN社のアメリカでの業績拡大は順調で、今や工場は複数の地に広がっていたが、そこで、突如発生したのがユニオン結成問題。

日本の労働組合は私が弁護士登録した時代とは大きく様変わりしたが、20世紀終盤におけるアメリカのユニオン事情を正確に知るためには、少し詳しく勉強しなければダメ。しかし、この映画が描く視点は、日本の企業内組合とは違い、アメリカではユニオン結成されると外部からユニオンの幹部が職場におしかけてくるため大変なことになる、という前提。

しかし、これが正当な視点かどうかはかなり微妙。最近は少なくなったが、それでもなお労働組合を依頼者とする事件をたくさん扱っている弁護士がこの映画を観れば大いに異論があるはず……？

そんな視点から「ユニオン不要論」については、賛否両論をきっちりと考えなければ……。

ユニオン結成の条件は？

ユニオンが結成されるのは従業員の過半数が賛成した時。したがって、ユニオン結成については、①賛成派②中間派③反対派の三派に分かれて懸命の多数派工作が……。深井社長もこの非常時にあたっては、生産ラインを停止しても中間派の説得が不可決と判断し、幹部たちも懸命の説得活動に……。良くも悪くもこの多数派工作こそが本来の民主主義の姿……？

ユニオン結成のバックには誰が……

2006年１月16日午後６時頃ホリエモンこと堀江貴文社長が経営するライブドア本社に強制捜査の手が入ったとの報道が流れ、日本中に衝撃が走った。

現時点ではこれがどのような背景にもとづくものかわからないが、ひょっとすればライブドアや堀江社長の「活躍」を快く思わない人たちからの何らかの働きかけがあったのかも……？　そんな興味を持って、この事件の今後の動向を見守っていきたいものだ。

それと同様の視点で考えれば、この映画のポイントは、マルケスが偶然まちの中で見かけたある風景。それは、あのセクハラ事件の後SAN SUN社を辞めたキャサリンが、ある投資顧問会社のビルに入って行こうとしていた姿。さて、これは何を意味しているのだろうか……？

ハイライトの攻防戦は……？

ユニオン結成の「オルグ」（今ドキの若い人はこんな言葉自体を知らないかもしれないが、これは直訳すれば勧誘……？）にはさまざまなプロが活躍している様子。それはビラと演説が中心で、私が大学時代に学生運動の中でやっていたことと同じ……？

一番難しいのは、ユニオン結成の賛成派の集会の中で「ユニオン不要論」を展開すること。今日はその集会に深井社長以下川森を含む幹部たちが出席したが、賛成派はここで、「この会社はあのセクハラ幹部を職場に復帰させている！」と川森に対して新たな攻撃目標を設定してきた。これはまずい……。

さらにそこに決定的影響を与えるべく、突然登場したのが何とあのキャサリン。キャサリンが、「私はあの男からセクハラを受けた。そんな男を職場に復帰させるとは何ゴトか！」とアピールすれば、会社側が決定的に不利になることは明らか。しかし、なぜかキャサリンは発言を躊躇している様子。そこで、前に出てきたのが川森で深井社長もこれを容認した。

さあそこで川森が喋ったことはナニ……？　そしてそれを受けてキャサリンが喋ったことはナニ……？　ちょっと出来すぎの感はあるものの、このハイライト

シーンは見モノ。さてあなたはこのシーンの攻防をどのように評価するだろうか？

「立ち上がれ！　負けるな！　日本の企業戦士とその家族たちよ」のアピール力は？

2005年の夏以降株価は上昇し、結果的に昨年１年間で約40％も上昇した。そして、今や株価は１万６千円台となり、ミニバブル的な面も……。しかし「失われた10年」と言われ続けてきたとおり、バブル崩壊後の日本企業はかつての元気を失ったうえ、「フリーター」「ニート」と呼ばれる若者たちが増え、今や「企業戦士」などという言葉は日本では死語……？　逆に中国企業やその社員たちの成長は著しく、このままでは日本は企業間競争において敗北必至、というのがここ数年の共通の認識だろう。

ところが、そんな時代状況の中でつくられたこの映画のキャッチフレーズは「立ち上がれ！　負けるな！　日本の企業戦士とその家族たちよ」。

しらけきった若者たちが多い今の日本で、「燃ゆるとき」というタイトルも含めて、さてこの映画がどこまでアピールできるかはかなり微妙……？

2006（平成18）年１月17日記

ミニコラム

「企業戦士」と「起業戦士」

「シューカツ」の学生たちは、試験対策や面接対応に精を出しているが、漢字テストをすれば、「企業戦士」とは書かず「起業戦士」と書くはず……？

それほど「企業戦士」という言葉は死語になってしまったが、新たに「起業」という前向き思考の言葉が、ミドルエイジや若者たちに定着してきたのは喜ぶべき現象。私は、ライブドアの崩壊とホリエモンの失墜を残念だと思っているが、ライブドア株の買い取りを表明したUSENの宇野康秀社長をはじめ、今をときめく「起業戦士」たちは、おおむね40歳前後。

最後の火を燃やしながら、今第一線から退こうとしている団塊世代の「企業戦士」たちに変わる、新たな「起業戦士」の活躍に期待したいものだ。

2006（平成18）年４月19日記